

変わりゆくポーランドの タデウシュ・カントル

津田 晃岐

私はこの5年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいるが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。現在、ポズナン市のアダム・ミツキェヴィチ大学で教えながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められ、喜んで筆を執った。

1. 札幌

この夏、久しぶりに札幌を訪れた。何年ぶりになるのか、すぐには思い出せない。10年、いや、もっとになる。それほど遠い昔の話だ。が、不思議なことに、この年月の間に町が変わってしまったようには思えなかった。

変わったのは、むしろ私の方だった。まるで北海道大学での学生時代を再体験していくような、何とも不思議な感覚に襲われながら、同時にあの頃とはすっかり変わった自分をも実感する旅となった。

当時の様々なエピソードが思い出されていくなか、タデウシュ・カントルについての記憶も私の中でポツリポツリと口を開き始めた。タデウシュ・カントルは、ポーランドのクラクフ市を中心に活動した画家、造形作家、そして演出家だ。自作の舞台の上に、俳優としてではなく、カントル本人として常に登場していたことから、前衛的あるいは実験的な演劇の演出家と見なされている。

そのカントルと私は札幌で出会った。とはいえ、それは本を通しての出会いであり、それ以外の可能性は初めからなかった出会いだった。というのも、私がカントルを知ったのは、彼の死を追悼する雑誌の特集号によってだったからだ。

今でもはっきりと覚えている——タデウシュ・カントルという名のポーランド人の演劇家を初めて知った日、そして彼の演劇論と実践から受けた衝撃と親近感、さらにはより彼を理解したいがためだけに夢中になってポーランド語を学んだ日々。

実は、カントルについては、以前に『POLE』



結婚5周年記念の旅行は北海道めぐり。
小樽運河の前で。筆者（右）とモミカさん

第73号で彼の講義の一部を引用したことがある。「変わりゆくポーランドの消費文化」をテーマとした記事の中で、「全能の消費」というカントルの反現代文明的な概念を紹介した。

演劇の分野で前衛的な活動を続けたカントルだが、彼の創作の根本には常に「個人」への眼差しがあった。大量生産・大量消費を宿命とする現代文明の中で、その恩恵を享受しながらも、画一化され、個性を失いつつある哀れな「個人」に、もちろんカントルは目を向けた。だが、それだけでなく、暴力によって生命を奪われた個人、物のように扱われる個人、虐げられる個人、不当に低く見なされる個人、記憶の彼方に忘れ去られた個人、無視される個人に対しても、カントルは眼差し

を注ぎ続けた。彼の演劇論の特徴として知られる「死の演劇」や「最下等のリアリティ」といった概念も、最終的には、彼の「個人」への眼差しと結びついた観がある。

自分の芸術で世界を救いたいとは思わない。
“普遍”なんか信じない。
我々の世紀のそれなりの経験の後では、それが今日どんな形で終わっているか、この悪名高い“普遍”が、何の、誰の役に立っているか、知っている。
今日では地球の大きさにまで広がってしまった分だけ、ますます危険になった“普遍”が。私は〈自分を救いたい〉のだ。
我が身可愛さからではなく、どういうわけか〈個人的な価値〉しか信じられなくて！
〈私は自分の狭い想像力の部屋に閉じこもる〉



こうしてカントル=写真上=は、終生演劇にこだわり、舞台に立ちながら、自らを「個人」のサンプルとして晒し続けた。カントルにとって、演劇とは、「個人」の想像力が仮初の姿をまとって現れる時空間であり、そうした「個人」の「想像力の部屋」こそが舞台だったからだ。

カントルと付き合いはじめて、もう20年以上になる。この間、私はいくつもの研究や論文を経て、一定の距離をカントルに対して持つようになった。心酔や信奉ではなく、冷静な理解と静かな共感とをもってカントルを見つめるようになった。それは、カントルが変わったのではなく、私の方が少しずつ変わってきたからだ。

もちろん、カントルと私の関わり自体は、私が変わったからといって終わるわけではないし、実際、研究や論文を通して今も続いている。

そして、カントルを切っ掛けに始まった、私とポーランドの関わりも、不思議な縁ながら、現在も続いている。

2. 寺山修司

カントルと日本をめぐる面白いエピソードとしては、カントルと寺山修司の友情を挙げることができる。この二人の奇才の交流は、何も演劇のレベルだけに留まらなかった。

つい最近、国際寺山修司学会刊行の『寺山修司研究』第6号のために、寺山とカントルの交友について執筆する機会を得た。その一部だが、引用させてもらう。

寺山修司(1935-1983)とタデウシュ・カントル(1915-1990)の両方の名を知る者は、同時に、この二人が生前深い親交を結んでいたことも知っている。二人の出会いについては、本人たちだけでなく、幾人かの証人もエピソードを紹介してくれている。

カントルは、人を寄せ付けない威厳をもち、つねに何かに怒っているような気難しい人だった。ところが、二十歳も年下の寺山とは気が合って、まるで仲のいい父子のように親しくしていた。パリで行われた演出家のシンポジウムで意気投合して以来、各国の演劇祭で出会うたびに親交を深めていたのである。^[1]

二人が初めて出会ったのは、1974年に「パリで行われた演出家のシンポジウム」のようである。それは、ジャン＝ルイ・バローの劇場レカミエ座で開かれたもので、世界各国から演出家、劇作家、演劇評論家らが集まった。このシンポジウムについては、寺山も『迷路と死海』(1976)の中で書いており、当然カントルの名前も登場する。また、寺山だけでなくカントルも、後年(1990)公演のために来日した際、当のシンポジウムでの寺山の印象をインタビューの中で語っている。

寺山修司には血縁性を感じたね。これは私がほかの芸術家にはほとんど感じないものだ。彼も私と同様、舞台で機械を好んで使ったし。彼はとても知的でユーモアのセンスがあった。パリのジャン＝ルイ・バローの劇場で開かれたシンポジウムに出席した時、彼は私の隣に座っていた。幸福や人類の未来につ

いてハイレベルな議論があり、私はいい加減うんざりして、異議を唱えたかった。その時寺山が手を上げて、短い話をした。「ふたりの日本人が川岸を散歩していた。ひとりが川に落ちて、溺れ死んだ。その教訓は、散歩するために川岸に行ってはいけない。」大まじめで退屈な雰囲気の中で、寺山はあえてそんな話をしたんだ(笑)。バローは「話はそれだけですか？」と尋ね、寺山は「これだけです」と言った(笑)。それを聞いて私は彼に深い共感を覚えた。短いありふれた話だが、ここには人間の運命をめぐる哲学がある。^[2]

その後も二人は、世界各地で開催された演劇祭やシンポジウムでたびたび顔を合わせ、親交を深めていった。そして、二人の友情は、寺山がこの世を去るまで続いた。死の前年、1982年の世界演劇祭「利賀フェスティバル」のために来日したカントルに会おうと、寺山は病を押して参加し、演劇祭後のカントルの東京公演のためにも骨を折った。公演当日には、劇場のロビーにさえ姿を見せ、「落ち着かない表情で客の入りを気にしていた。彼はわが国の演劇人のなかでもっとも最初にカントルを認め、彼に同志的な共感を抱いていた。」^[3]



そういえば、私が寺山修司=写真上=を知ったのも札幌だった。ちょうど北海道大学にいた時分、死後10周年を迎えていた寺山の作品が軒並み復刊され、ちょっとしたブームになっていた。既に演劇に関心を持ち、カントルと出会っていた私は、これを機に寺山についても興味を持ち、研究するようになったのだった。

3. 「インスピレーション」

寺山修司と同じく、カントルもまた、自国よりも先ず外国で高く評価された演劇家だ。そして、今年(2013年)死後30周年を迎える寺山が、この機に顧みられ、ますます評価を高めているように、死後20年を経たカントルも、ようやく自国ポーランドで正当に評価されつつあるようだ。半世紀に及ぶカントルの創作全期を網羅した3巻本の論

文集(2004年出版)を切っ掛けに、カントルの演劇論あるいは芸術論を、現代演劇や現代美術の流れの中でもう一度捉え直そうという動きが起こっている。カントルは、今やただの「異端児」ではなく、現代芸術史の最も重要な人物の一人となりつつある。演劇だけでなく造形美術や絵画の分野でも活躍したカントルの場合、演劇と俳優術に特化していたグロトフスキとは違い、より広い文脈での再評価が行なわれているようだ。現に、アダム・ミツケヴィチ大学のポーランド学科の「ポーランド文学史」の授業でも、現代ポーランド文学に影響を与えた思想の一つとしてカントルの演劇論あるいは芸術論が紹介され、一時間の講義をまるまるカントルに捧げただけでなく、他の機会にもカントルの言葉をたびたび参照していた。

もともと国外では早くから評価されていたカントルだが、近年では、ポーランド国内でも、カントルに捧げた、あるいはカントルに触発された様々な学会やイベントが各地で開かれている。例えば、2010年には、ポズナン市でカントルの美術作品の展覧会が、またヴロツワフ市で芝居『ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ』の上映会と学会が、そしてカントルの本拠地であったクラクフ市では死後20周年を記念した学会「今日こそタデウシュ・カントル！」が開催された。また、2011年には、ジェシュフ市でカントル作品の展覧会や上映会などから成る複合的イベントが行なわれた。そして、2013年から2014年にかけても、展覧会やパフォーマンス上演や出版から成る複合イベントが、クラクフ市を中心にして企画されており、その名も「誰がインスピレーションを？タデウシュ・カントル！」というものである。

注釈:

^[1] 九條今日子『回想・寺山修司 百年たったら帰っておいで』デーリー東北新聞社、2005年、203頁。

^[2] 扇田昭彦「人形、オブジェ、梱包、絵画…。美術家としてのカントル」、『Brutus』1990年6月1日号(第11巻第10号)、94頁。

^[3] 四方田犬彦『オデュッセウスの帰還』自由国民社、1996年、36頁。

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)